

人生会議（ACP）と在宅歯科医療

歯科医師 三木次郎

人生の最終段階における医療・ケアの在り方は「医師等の医療従事者から適切な情報の提供と説明がなされ、それに基づいて医療・ケアを受ける本人が多専門職種
の医療・介護従事者から構成される医療・ケアチームと十分な話し合いを行い、
本人による意思決定を基本としたうえで、進めることが最も重要な原則である」と
されている。

全人生を通じて口から食べることは人の尊厳である。終末期においても口腔機能
管理、口腔衛生管理により最期まで口から食べられる機能を維持することは、我々
歯科専門職の目標の一つでもある。しかし、疾病の種類や病状によっては経口摂取
を諦めなければならないこともある。

その反面、本人や家族にとって口から食べることは乳・幼児期からの当たり前の
行為であり、人生の楽しみであり、生きている証でもある。したがって、人生の最
期まで口から食べたい、あるいは食べさせたいという意思は尊重されなければならない。

このような二つの対立したことを集約するには、本人の意思、希望、価値観等を
代理人と共有し、それらを基本に、医療者・介護者の正確な病状判断、予後予測等
の意思決定支援を踏まえた話し合いのプロセスを繰り返し行い、最も本人の利益に
なるようにすることが重要である。

つまり、人生の最終段階における経口摂取に関わる医療・ケアの意思決定につい
ても、倫理的な判断を踏まえて、医療・介護の方法について合意形成をしていくこ
とが、人生の終末を考える上で一つの有効な手段であるといえる。

今回、歯科的な立場からのACPへの関与や人生の最終段階における医療・ケアへ
の関わりについて考えてみたい。